

佳作

仲間とつかんだ最後の四点

宮崎県 宮崎県立小林高等学校一年 黒松 美宇

中学三年生の夏、当時所属していたバスケットボール部にとって最後の中体連が迫っていた。三年間の努力の集大成を見せる舞台であり、誰もが気持ちを一つにして練習に励んでいた。だが、大会のわずか二日前、私にとって衝撃的な出来事が起こった。

その日の練習は、試合を意識して特に激しいものだった。私は気合いが入りすぎて、リバウンドに飛び込んだ時に着地を失敗し、右足を強くひねってしまった。鋭い痛みとともに膝から崩れ落ちると、周りがざわめいた。すぐに病院に行くと、診断は「小さな骨折」。先生から「本番は無理をしない方がいい」と言われた瞬間、頭が真っ白になった。あれほど頑張ってきたのに、最後の大会に出られないかもしれない。絶望で胸が締め付けられ、涙が止まらなかった。

部活に戻ると、仲間たちは私を囲んだ。私はうつむいて、

「ごめん、試合に出られないかも。」
とつぶやいた。その時、キャプテンがまっすぐに言った。

最初は足が思うように動かなかった。ドリブルでもスピードは出ないし、ディフェンスでは抜かれることもあった。だが、仲間たちが必死になってボールを追いかけている姿を見ていたら、不思議と右足の痛みは引いていた。ゴール下でボールが私の手元に来た。私はもう、自分がケガをしていることなどに忘れていた。ゴールをめがけてジャンプし、放ったボールはゆっくりとリングに吸い込まれた。決まった。ベンチの仲間たちが立ち上がって叫んでいた。

その後も仲間のパスに支えられて、私は計四点を決めることができた。わずかな点数かもしれない。けれど、その四点は仲間と共に積み上げた三年間の象徴だった。

試合は最後まで白熱したが、惜しくも敗れてしまった。試合最後のブザーが鳴った瞬間、涙があふれた。悔しさもあったけれど、それ以上に「仲間と最後まで戦えた」という喜びで胸がいっぱいだった。キャプテンが肩を抱いて、

「頑張ったね。」
と言ってくれた時、言葉にならないほど感謝の気持ちが込み上げた。

振り返れば、三年間は決して順調ではなかった。厳しい練習に心が折れそうになったことも、意見がぶつかって仲間と口をきかなくなってしまったこともあった。そ

「みうがいない試合なんて考えられない。最後まで一緒に戦おう。」

他の仲間も、
「ベンチにいてくれるだけで力になる。」

「絶対一緒にコートに立とう。」
と声をかけてくれた。私はその言葉に救われ、涙がまたあふれた。

迎えた本番当日。足には分厚いテーピングを巻き、松葉杖をつきながら会場に入った。観客席からの視線が痛く、「本当に出るのか」と囁かれている気がした。それでも仲間たちは笑顔で、

「大丈夫、大丈夫。」
と励ましてくれた。試合前、円陣を組んだ時、キャプテンが言った。

「今日の試合は絶対に皆で戦う。たとえケガしても、みうは私たちの仲間だよ。」

その言葉で胸が熱くなり、震える声で、
「ありがとう。」
と返した。

試合が始まり、私は最初ベンチにいた。コートに立つ仲間の姿を見ながら、心の中で何度も「出たい」と叫んでいた。そして後半、先生が私に問いかけた。

「どうする？ かなりきついと思うよ。でも、出たいなら止めない。」
私は迷わず、

それでも最後の最後に、「仲間がいるから頑張れる」ということを強く実感した。ケガをして心が折れかけた私を支えてくれたのも、笑顔で背中を押してくれたのも仲間たちだった。

あの中体連で学んだことは、勝敗以上に大切なものだと思う。努力することの意味、仲間を信じること。そして、人は一人では戦えないという事実。あの日決めた四点と仲間の笑顔を胸に、私はこれからも前を向いて生きていく。